

ケアのある
風景

社会福祉法人ユーアイ二十一

特別養護老人ホーム

太陽の家横濱羽沢



入居者の笑顔のため 個別ケアを徹底し 在宅時と変わらない 暮らしの継続をめざす

和のインテリアが印象的な玄関ホールや
足触りの柔らかな畳敷きの廊下が

家にいるようなくつろいだ雰囲気演出する

特別養護老人ホーム「太陽の家横濱羽沢」。

入居者には自宅にいるように過ごしてもらうため、個別ケアを徹底。

職員が企画するイベントも数多く用意され、

施設内には入居者の穏やかな笑顔があふれている。

取材・文／松浦美紀



何気ない会話を交わす入居者たち。施設の穏やかな空気を感じとれる



赤いのれんも飾り、雰囲気づくりにも手を抜かない

イベントも 日常生活も 一人ひとりの ニーズに対応

どこからともなく聞こえてくるチャルメラの音とともに漂ってくる、ラーメンの香り。フロアの一角には屋台の赤いのれんが掲げられ、ラーメン屋の白衣と帽子に身を包んだ職員が麺の湯切りをしている。この日は「太陽の家横濱羽沢」で年に1回開催されるラーメン屋台のイベント。できあがったラーメンは岡持ちちに入られ、入居者のところに運ばれていく。出前といっても施設内なのでほんの数メートルだが、「お待たせしました！ 醤油ラーメンです」と

差し出された入居者は、「懐かしいね」と目を細め、おいしそうに麺をすすっている。

同施設では、餅つきやいちご狩りなど最低でも月に1回は施設全体でイベントを開催しており、その他に各ユニットで

も独自に実施。年に1度の大イベントとしては、ラーメンのほかには寿司屋も大人気だ。「なかなかラーメン屋や寿司屋に行けなくなったお年寄りに、その雰囲気味わってもらい、笑顔になってほしい、という思いから始めた取り組みです。さまざまなイベントを用意しているのは、好きなものを選びやすくするため。イベントカレンダーをつくって、少しでも楽しみな気持ちを増やせるように企画しています」と、社会福祉法人ユーアイ二十一横浜・県央エリア



岡持ちでラーメンを運ぶ様子はまるで“出前”そのもの



1杯1杯職員が丹精込めてつくる



お手製のラーメンを堪能する入居者たち。自然と笑顔がこぼれる

統括管理者の中村豪さんは語る。

同施設は個別ケアをモットーとしており、一人ひとりの好みに対応することが基本。それは、日常生活においても徹底している。

「毎朝9時に申し送りをしますが、約1割の入居者がまだ起きていません。今までの生活を継続してもらうことが個別ケアの基本理念なので、施設のルールに合わせるのではなく、それぞれのペースで生活してもらいます。そのためには、その人のことを詳しく知っておく必要があるのです。ライフスタイルシートというアセスメントシートと24時間の生活の様子がわかる24時間シートを使用しています」と、同施設次長の歌川久美さんは説明する。同施設の特養は110床なので110通りのライフスタイルがあり、その人に合わせたケアプランが存在する。横浜市では、これらのシートを特養におけるケアプランの第3表、第4表として採用している。

1日のスケジュールが異なると対応する職員は大変そうだが、施設内は和やかな雰囲気でもタバタしている職員は見当たらない。個別に対応することで、むしろ忙しい時間を分散できるという。

「職員が時間に追われるのは、ここまでやっておかないと迷惑をかけるなど、次の勤務の人に配慮していることが意外と多いです。そのせいで入居者が置き去りになってしまうことも。大事なのは、常に入居者ファーストであること」と歌川さん。個別ケアの終着点は看取りで、一人ひとりのニーズに細やかに対応していくことで、家族の後悔のない看取りもサポートできると話す。



居室の床は畳と絨毯の2種類



主任の関根真理さん



次長の歌川久美さん



統括管理者の中村豪さん



趣のある玄関ホールからは、
日本庭園をイメージした中庭が見える



ヒバの浴槽は「香りがいい」と入居者から好評だ

社会福祉法人ユーアイ二十一
特別養護老人ホーム

太陽の家横濱羽沢

●神奈川県横浜市神奈川区羽沢町2-1

☎045・442・4907

🌐www.ui21.or.jp/

2018年開設。特養110床、ショートステイ10床。一人ひとりのライフスタイルに合わせたケアを行っており、自宅のように過ごせるよう廊下や居室の一部の床に畳を採用



ICTを活用し 科学的根拠のある ケアで安心して 働ける職場に

「太陽の家横濱羽沢」では、5年前の開設時から全床に見守りセンサーを導入。心拍や呼吸、離着床などを離れた場所から確認できるため、職員の負担軽減につながっている。「使ってみるまでは魅力がわからず、1時間ごとに巡視に行けばいいと思っていた。でも今は、夜間の巡視は2時間に1回。寝ている人を起こしてしまうこともなく、夜勤時の安心感が全然違います」と、同施設主任の関根真理さんが止まっていたり、転倒してそのまま床に倒れたり…。…という心配はなくなり、精神的な負担も大きく軽減されているという。

終末期においても、介護職がこれまでのデータと比較して呼吸や心拍の変化を読み取ることができるようになり、家族に連絡して看取りに立ち

会ってもらえるようになった。家族からは感謝され、介護のやりがいにもつながっている。「職員の勤や経験に頼らない、科学的根拠のあるケアを重視しています。以前は、夜間にお亡くなりになったら、必ず私が出動していましたが、今は介護職がデータを示して説明できるので、私が行く必要もなくなりまし」と歌川さん。加えて、同施設では夜間オンコールの代行サービス「ドクターメイト」を利用してお

り、看護師の負担も軽減。昼間の仕事に集中できて効率も上がり、定着にもつながっているという。

「人材確保が困難な時代ですから、法人を上げてICTの活用による業務効率アップに取り組んでおり、特に時間をつくることを意識しています」と中村さん。見守りセンサーもその一環だが、朝の申し送りも仕事をしながら参加できるように骨伝導のインカムを支給。記録の音声入力や介護助手の導入な



5階のテラスからは富士山も見えるとカ



保育室の子どもたち。コロナ前には入居者との交流も

どで効率化、分業化を推進し、介護のもっとも重要な対人サービスに集中できる環境を整えている。

同施設の5階には職員と地域の子どもを受け入れられている保育室があり、交流イベントも実施。広いルーフトラスとつながる多目的スペースは、地域に開放している。「特養は閉鎖的になりがちですが、助け合いながら安心を与える場になっていきたい」（中村さん）と、地域に開いた施設もめざしていく。